

ケネディの予言、再び

新興技術で揺らぐ核抑止力

第3回



クジラのカマ掘り

あいかわ
会川

はるゆき
晴之

(毎日新聞客員編集委員)



カーター元米大統領の海軍時代の上司で、「米原子力海軍の父」と称されるリッコーバー提督の尽力もあり、米国は1955年1月に世界初の原子力潜水艦「ノーチラス」を導入した。ライバルのソ連を出し抜き、海の世界で先行したことを前回、紹介した。だが、自信満々の米国に、思わぬ落とし穴が待ち構えていた。

世界初の原潜就役から約2年半後の57年8月、ソ連は世界初の大陸間弾道ミサイル（ICBM）「R7ロケット」の実験に成功した。10月にはこのR7ロケットを使い、世

界初の人工衛星「スプートニク」を宇宙空間に打ち上げた。ソ連の核兵器がミサイルに載り、大西洋を越えて米本土にまで届く現実米国は直面する。「スプートニク・ショック」は軍事的な影響だけにとどまらず、米国民の感情を激しく揺さぶる大事件となった。

ソ連が最新鋭のミサイルを原潜に載せ、米国沿岸に押し寄せてくるのではないか。そんな妄想が広がり、米国中がパニック状態に陥った。ソ連原潜の「目撃証言」が全米各地から相次ぐ事態となる。



米海軍のミサイル原潜「フロリダ」。かつては戦略原潜として活動、潜水艦発射型弾道ミサイル（SLBM）を搭載し、哨戒活動に当たっていた＝米国防総省提供

南部フロリダ州の海岸でスキングダイビングした女性は「3隻の潜水艦を見た。そのうち1隻はわずか3メートルの距離にあった」と証言した。メキシコ湾に面するテキサス州からは、水深がわずか1・5メートルしかない浅瀬で「潜望鏡が出ていた」という報告が上がってきた。前回は紹介したように、潜水艦は巨大な船だ。水深1・5メートルの浅い海など航行できるはずもない。

さらに、全米各地の海岸に設置された潜水艦監視塔では、市民の自警団が数年間も交代で見張りを続けた。

軍出身のアイゼンハワー大統領は巻き返し策に懸命に取り組む。ICBMだけでなく、ソ連に先んじて潜水艦発射弾道ミサイル（SLBM）と、それを載せる原潜を開発せよと命じた。わずか2カ月後に1番艦「ジョージ・ワシントン」の建造が決まる。米政権の必死さを物語るエピソードと言える。

米海軍は第二次世界大戦終結後、潜水艦から発射するミサイルの開発を急いだ。母体となったのは、ドイツが大戦中に開発したV1巡航ミサイルだ。47年にディーゼル潜水艦からの発射に成功した。これをさらに発展させたのが、核巡航ミサイル「レギュラス」で、52年から順次、海上艦や潜水艦への配備が始まった。

ただ、レギュラスには欠点があった。射程が1000キロを切る短射程であること。飛行速度が亜音速と遅く、ソ連



米海軍のSLBM「トライデントD5」の発射実験＝米国防総省提供

の防空網突破は難しいとの懸念があった。また、発射する際に海面上に浮上しなければならず、随伴する艦船が発射から着弾までミサイルを誘導する必要もあった。敵に発見され、攻撃を受ける危険が絶えずともなっていた。

大統領は、より能力の高いSLBM「ボラリス（北極星）」の開発を急ぐよう命じた。海軍は、すでに原潜用の核ミサイルの開発に取り組んでいた。当初の計画では、射程は2800^キを想定していたが、大統領の命を受けて開発を急ぐことを優先する。距離を犠牲にしたことで、計画より3年早く開発を終えた。

射程を2000^キに短縮したボラリスは60年に水中からの発射実験に成功、原潜に積み込む準備が整った。現在、米軍が運用する最新型のSLBM「トライデントD5」には、1基あたり最大14発の核弾頭が載るが、ボラリスは1発だけの単弾頭だった。

その年の11月15日、大西洋に面する米東岸のチャールストン海軍基地からSLBMボラリスを16発搭載した原潜「ジョージ・ワシントン」が66日間に及ぶ航海に旅立った。これが今に続く戦略原潜（SSBN）による哨戒活動の始まりとなる。冷戦の本格化を告げる瞬間でもあった。

ジョージ・ワシントンは大西洋を横断してノルウェー海に向かう。ボラリスは射程が短いため、ソ連近海にまで赴く必要があった。米海軍は、哨戒地域であるノルウェー海

に近い欧州2カ所に前進基地を設けた。英北部スコットランド西部のホーリー・ロツホ軍港と、地中海に面するスペイン東岸のロタ軍港だった。両基地への前方展開は92年まで続いた。

核抑止力の完成

ICBMに次いで、SLBMを積む戦略原潜の就役で、核をめぐる世界は大きく変わった。戦略面での最大の変化は、米国の核戦力に「第二撃」能力が加わったことだ。地上配備のICBMや広島・長崎に原爆を投下した戦略爆撃機は、敵からの核攻撃を受けて全滅する可能性がある。だが、海に潜り、その居場所を突き止めることが難しい潜水艦は、陸上配備型の核戦力に比べ生き残る可能性が高いと見込まれていた。

原子力という無限のエネルギー源を動力にする原潜なら、食糧さえあれば何カ月でも海に潜ったまま七つの海を航行できる。その原潜にSLBMを載せれば、有事の際、敵に必ず報復できる。核による報復攻撃が確実であれば、敵は米国を核攻撃することをためらう可能性が高まる。米国はソ連に勝る核抑止力を先行して手に入れた。

SLBMは戦術的にも使い勝手が高い特徴がある。敵地に近い海域から発射すれば、短時間で届く。ICBMなら米国からソ連まで約30分間かかるが、ノルウェー海からは

ソ連は目と鼻の先だ。防衛態勢を築く時間が極端に短くなる。さらに言えば、米国のICBMの射程外の地域にあり、これまで手の届かなかった戦略拠点も攻撃できる。

当初こそミサイルの射程が短いという制約があったため、ソ連近海での展開を余儀なくされた。だが、ミサイルの射程が伸びれば世界中のどの海域からでも敵地攻撃が可能となり、作戦の柔軟性が増していく。敵から見れば、配備基地の場所が判明しているICBMの飛行航路は予想できるが、SLBMはどこから飛んで来るのかわからず、防御が難しい。

SLBMを担当する海軍、ICBMと戦略爆撃機を管轄する空軍への対抗手段を持ちたい。競争欲に駆られた米陸軍は59年、デンマーク領グリーンランドで極秘計画に着手する。氷床の中にクモの巣状に21本のトンネルをくりぬき、そこに核ミサイル600発を配備する「アイスワーム計画」だった。

トランプ米大統領が米国領にしたいと言いだしたことで一気に脚光を浴び始めたグリーンランドは、米ソの中間地点という地政学上重要な場所にある。そこに核ミサイルを配備すれば、米本土に配備しているICBMより短時間でソ連や東欧諸国の標的に到達できる。ライバルである海軍の戦略原潜は海に潜っているため、緊急連絡を取ることが難しい問題があるが、陸上基地ならいつでも連絡が可能な

はずだ。有事への対応力に勝るのは、我々が推すアイスワーム計画しかない。そんなうたい文句をもとに、陸軍は海空軍の反対を押し切った。

だが、大自然の力がこの計画の実現を阻んだ。「安定している」と思われていた氷床は、1年間に1メートル以上降り積もる雪の重みを受けて絶えず「沈み込む」ことがわかった。わずか数年でミサイル基地は氷と雪に押しつぶされてしまう。さらに、氷の壁に阻まれるため、通信事情が思ったよりも芳しくないことも判明した。想定外の事態を受けて、計画は63年に中止となる。

陸軍の野望がといえ、米国は戦略原潜をより重視するようになった。ポラリス原潜は66年までの7年間で41隻も建造され、東西冷戦の最前線に次々と送り込まれていった。

海を透明にする

SLBMの開発では先行した米国だが、いずれソ連が追いついてくると確信していた。実際、ソ連は米国から約2年遅れの58年に初の原潜を就役させ、SLBMを搭載する戦略原潜も含め、68年までに55隻の原潜を次々に配備していく。

ソ連も戦略原潜を導入しはじめたことを受け、米国は二つの対策に取り組んだ。一つ目は、米原潜のステルス性向上。二つ目は、敵潜水艦を探知する手法の開発だった。

初の戦略原潜であるジョージ・ワシントンや、その姉妹艦4隻は、いずれも静粛性などを気にかけずに建造した船だった。バッテリー走行中は無音に近い状態にあるディーゼル潜水艦と違い、原潜からは絶えず騒音が出る。原子炉に冷却水を送るポンプや発電機、蒸気タービン軸の出力回転数を下げる減速ギアなどがその音源だった。

このままでは、虎の子の戦略原潜がソ連を攻撃する前に探知されて沈められかねない。米国は柔かい材質でできたクッションを振動音が出る機械の下に敷き詰める「ラフト化」を進め、劇的に音を減少させた。その後も「忍びの術」を磨き続ける。

ソ連の原潜を見つけ出す技術の開発にも注力した。レーダー波が届かない海中を潜航する「見えない」潜水艦を「見える」ようにしたい。まさに神への挑戦と言え、困難な取り組みが予想された。米国は49年に原潜導入計画を決定した時点で、今後は原潜の時代が到来するとの確信を深めており、翌50年から早くもソ連の潜水艦を見つける戦略的な対潜水艦作戦（ASW）の取り組みを開始した。

開発を担当した米海軍の研究開発部長のフーバー提督は、最大の目的は「発射される前にソ連のSLBMや戦略原潜を破壊することだ」と語っている。ソ連の第二撃能力をたたき潰すことができれば、米国は圧倒的な優位に立てる。米本土に近づこうとする核ミサイルを積むソ連原潜が

通る海域に、潜水艦から出る音を聞き取るセンサーを設置することで、ソ連戦略原潜の動向把握を目指した。

米国は、後に SOSUS（音響監視システム）と呼ばれる集音センサー網の整備を50年から着手する。SOSUSは、海の中の音を集めるパッシブソナーから成り立っている。電話やデータを送受信する海底通信ケーブルのように、海底に設置する。データは、ケーブルを通じて陸上施設へと送られた。

米東海岸沿岸にある大陸棚に設置したセンサーは、周辺海域だけでなく、大西洋をまたいで数千キロ先に位置する英国西の大陸棚に至る広大な海域の音を拾い集めた。海中では音は秒速1・5キロの速度で伝わる。センサーが集めた膨大な音響情報には、クジラ同士が求愛しあう音や、無数のオキアミがぶつかりあう時に生じる「ツピンツピン」という音も含まれていた。

潜水艦乗りだったカーター元大統領は、自伝「なぜベストを尽くさないのか」（英潮社刊）の中で、ディーゼル潜水艦時代の経験を紹介している。完全に近い静寂の環境であれば、潜水艦の中から「海中のあらゆる種類の生物の音が聞こえ、また極めて遠方にいる他の船を感知することもできた」。

問題は、こうした無数の雑音をより分けて、潜水艦の音突き止めることにある。現代では、スマホにも撮影した

映像から雑音を取り除いたり、余計な人物や景色などを簡単に消したりする機能が備わっている。だが、冷戦時代にそんな便利なものはなかった。スマホと同じ作業をしたのは、米国が誇る世界最速のクレイ社のスーパーコンピュータだった。

90年代後半、日米はスパコン調達をめぐる激しい貿易戦争を戦った。スーパー301条という名を覚えていらっしやる方も居るだろう。日本はスパコンをもっぱら民生に使うが、米国は軍事や宇宙開発に使う。SOSUSがキャッチした敵潜水艦の音の分別や、核実験で得られた膨大なデータの分析にはスパコンが必須だった。極めて重要な戦略物資で、だからこそ、米政府や議会はクレイ社の経営を支援するため、日本製のスパコン調達を厳しく規制しようとした。

米国は51年に初めてカリブ海のパハマでSOSUSの性能を確かめる実験に挑む。良好な成果を納めると、翌52年から米東海岸への敷設を始め、次第に設置場所を増やしていった。

ソ連北方艦隊の戦略原潜基地は、ノルウェーに近いソ連西部のコラ半島のムルマンスクなどにある。そこから米東海岸に近づくためには、幅の狭いチョークポイントと呼ばれる海域を必ず抜ける必要があった。グリーンランド、アイスランド、英国の間にある通称「GIUK」ギャップだ。



グリーンランド・アイスランド・英国の間にある「GIUK」ギャップに面する英スコットランド最北端のダウンレイ。中央にあるのが高速増殖炉、右端にあるのが原潜用施設。冷戦時代、ソ連の潜水艦を監視するためのSOSUSが設置されていた＝2011年12月、筆者撮影

極東に位置する日本は、カムチャツカ半島ペテロハバロフスクに配備されているソ連太平洋艦隊所属の戦略原潜と向き合っていた。宗谷、津軽、対馬海峡がソ連太平洋艦隊の戦略原潜が通過するチョークポイントとなる。海上自衛隊の潜水艦や対潜哨戒機、艦船に搭載した対潜ヘリなどが監視に当たった。中国海軍が勢力を増した現在では、宮古海峡など南西諸島の海峡も監視が必要なチョークポイントとなっている。

米国が自信をもって整備を始めたSOSUSが初めて原潜の音を捉えたのは60年11月のことだ。皮肉にもそれは米原潜ジョージ・ワシントンだった。米東海岸の基地を出航後、潜水艦は一路、ノルウェー海に向かった。だが、先に触れたように騒音を発していたため、動向が手に取るようにわかった。その後、4隻の姉妹艦がノルウェー海での哨戒に向かった際も、すべてSOSUSがキャッチしている。

ソ連の原潜を初めてSOSUSが捉えたのは62年7月、カリブ海のバルバドスに設置したセンサーが、GIUKギャップを通過したソ連原潜の音を拾った。その能力への評価が高まり、米国は65年にGIUKギャップにもSOSUSを整備、その後は、さらにノルウェー海や、北方艦隊の基地に近いバレンツ海などにも拡大した。74年までに22カ所、81年には36カ所にまで設置場所が増えた。

米国には「地の利」もあった。SOSUSを敷設した

G I U Kギャップに位置するグリーンランド（デンマーク）、アイスランド、英国の3カ国は、いずれも北大西洋条約機構（NATO）加盟国。つまり米国の同盟国だ。海中で集めたデータはケーブルで地上に陸揚げする必要があるが、そのための地上施設を米国は問題なく設置することができた。

一方のソ連は、米国の戦略原潜を監視したくとも、それに最も適したチョークポイントにひとつとして同盟国も友好国も無かった。地上施設を建設することなど、夢のまた夢だった。

ただ、ソ連は米戦略原潜の監視や追跡を完全に諦めたわけではなかった。74年11月10日、ソ連の攻撃原潜が、米戦略原潜が前進基地として使う英北部スコットランドのホーリー・ロツホ軍港近くの湾深くにまで潜入を果たす。同基地からノルウェー海に向かう米戦略原潜「ジェームズ・マディソン」を追跡する任務を帯びていた。

だが、両艦は海中で衝突する事故を起こした。通常なら米戦略原潜は、基地周辺の狭い航路では浮上して航行し、安全な外海に出てから潜航する。だが、この日に限って、出航直後から潜航する異例の行動を取ったため、予想外の事故が起きた。

米英ソともこの事故については機密扱いとした。明らかになったのは、事故から実に43年後の17年、米国が機密解

除したスコウクロフト米大統領補佐官（国家安全保障担当）からキッシンジャー米國務長官あての文書に記されていた。米英は、ソ連の原潜に懷奥深くまで忍び込まれた事実を屈辱と捉えたからだと解釈されている。

透明な海

「地の利」だけでなく、米国には対潜水艦戦を有利に運ぶ条件にも恵まれた。ソ連の原潜は、初期の米国の戦略原潜と同様、静粛性をまったく気にかけていなかったからだ。

ソ連の原潜は、40ノット以上の猛烈な速度で海中を走り回るスピード狂で、まるで爆音を響かせる暴走族のようだった。ホテル級、エコー級、ノーベンバー級の3タイプの原潜を、米国は頭文字を取って「HEN」と呼んだ。「HEN」は英語でメンドリという意味。うるさい音を出す潜水艦という意味だった。

SOSUSだけでなく、水上艦艇に搭載する対潜ヘリや、対潜哨戒機の整備なども米国の対潜水艦能力を強化した。ソ連の潜水艦が居るとみられる海域にソノブイを透過し、徹底的に潜水艦狩りを続けた。追いつてられる潜水艦側の気持ちはどんなものか。日本の海上自衛隊で潜水艦艦長を務めた元海将に聞くと「ソノブイをまかれるとメチャクチャ気持ちが悪い。もしかしたら相手に艦を把握されてしまったのかなと疑心暗鬼になる」と語ってくれた。



稚内市のノシャップ岬から見た宗谷海峡。冷戦時代はソ連の戦略原潜を監視する最前線だった＝2025年6月13日、筆者撮影

SOSUSがまだ整備されていない海域では、米海軍や同盟国の艦艇が艦尾からえい航する方式のセンサーを使って水中の敵を追った。米国は日本も含めた同盟国ともソ連原潜の動向データを共有してソ連原潜を世界中で追いかけた。

日本の海上自衛隊はこの時期、潜水艦や対潜哨戒機などを駆使して、宗谷、津軽、対馬海峡などの日本近海で対潜作戦を担当していた。米原潜は、海自が入り込めないオホーツク海の奥深くにあるペトロハバロフスクの近海にまで潜航し、ソ連太平洋艦隊に所属する戦略原潜部隊の動向監視を続けた。

米ソの潜水艦バトルを克明に描いた「潜水艦諜報戦 (Blind Man's Bluff)」(新潮社刊)によると、ソ連は、HENの後継艦にあたるヤンキー級戦略原潜2〜3隻を、常時、大西洋に展開していた。哨戒する海域は、米東海岸に近いカリブ海のパミューダ諸島南東と、欧州に近いポルトガル沖のアゾレス諸島西部。ソ連の潜水艦は、事前に定められた作戦通り、判で押したように、米国が「ヤンキー・ボックス」と呼ぶこれらの海域を渡り歩いた。米軍は、SOSUSなどの助けを経て、行動を逐一、捕捉していた。地中海でも激しい潜水艦戦が戦われていた。米国は、大西洋と地中海を結ぶチョークポイントであるジブラルタル海峡にSOSUSを設置して警戒に当たっていた。73年に

あつた第四次中東戦争の際に、アラブ諸国寄りのソ連は26隻の原潜を地中海に派遣したが、米軍はすべてを把握していたと「潜水艦諜報戦」は記している。

たゆまぬ努力の積み重ねにより、米軍はソ連の戦略原潜の動向を把握し、追尾できる態勢を築き上げた。技術力と同盟国とともに築いたグローバルなネットワークにより、不可能とされてきた海を「透明」にする作業を、ほぼ実現した形となっていた。

だが、米国にとって「幸せな時期」が終わりを告げる時が来る。まずは、暴走族ばりに爆音を鳴り響かせ航行していたソ連の原潜に不思議な変化が現れはじめた。

クジラのカマ掘り

きっかけのひとつは、米ソ原潜同士の間で衝突事故だった。69年11月15日、ソ連北方艦隊の原潜基地ムルマンスクに近いバレンツ海で、ソ連の戦略原潜「K19」と、これを追尾していた米原潜「ガトー」が衝突する。翌70年にも、ソ連太平洋艦隊の原潜基地ペトロハバロフスクで、米ソの原潜が衝突する事故が起きた。

ソ連は、米原潜が原潜基地周辺にまで潜入する危険を冒していることに気付く。さらに、米国人スパイが67年以後、SOSUSの存在や、米潜水艦の追跡手法などの極秘情報をソ連に提供し始めたことも重なり、ソ連は米国に「見ら

れている」ことを初めて悟る。

ソ連はこうした情報をすぐに活かした。潜水艦の静粛化に着手したほか、米国の潜水艦監視網に引っかかるために、行動様式の改変に取り組み始める。

その代表例は「クジラのカマ掘り」と呼ばれる。GIUKギャップにSOSUSが敷設されていることを知ったソ連は、このGIUKギャップを通過する前後48時間、大騒音を出すおんぼろ貨物船の真後ろに潜水艦をびたりとはり付かせて航行させ始めた。物を隠すのに最適な場所とは「群衆に紛れ込むこと」と言われる。その手法と同じで、貨物船が出す大騒音で潜水艦の音を隠し、米国の監視網を欺こうと試みた。

86年に西大西洋であつた米ソの原潜同士の死闘を描いた「敵対水域」(文芸春秋刊)によると、クジラのカマ掘りは、まったくもって効果がなかった。米軍は、GIUKギャップだけでなく、すでにソ連近海にもSOSUSを張り巡らしていたからだ。

一方、ソ連潜水艦から見ると、この戦術は、貨物船に近づきすぎると引っぱり込まれて双方が衝突する可能性がある危険な航法だった。減速して航行しなければならぬ舵が利きにくく、不眠不休で細心の注意を払いながらの厳しい航海だった。

ソ連潜水艦の行動様式の変化は、もうひとつあつた。潜



冷戦後期、ソ連の戦略原潜は追いかける米原潜を逃れるため、北極圏の氷の下に潜り込んだ。米国は現在も、ロシアに対抗して北極圏への原潜派遣を続けている＝米国防総省提供

航中、突然、急激に進路を変えたり、旋回させたりする行動を繰り返すようになった。米原潜が、ソ連原潜のソナーの死角にびったりと張り付き、追尾しているという情報が出た。パイロットもたまたまされたからだ。肩越しに後ろを振り返るように、艦を旋回させ、艦首部分にあるソナーで斜め後方にあるはずの米原潜を見つけようとした。米海軍は、衝突事故を招きかねないこの危険な行動を「クレイジーワン」と名付けて恐れた。

また、ソ連はSLBMを積む戦略原潜を守るために、対艦攻撃能力に優れた攻撃原潜を帯同させるようになる。つきまとう米英などの原潜を追い払う「露払い」のような役目を努めた。攻撃原潜の本来業務は、チョークポイントなどに潜み、米の戦略原潜を見つけて追い回すこと。それを諦めざるをえないほど、ソ連海軍の危機感は高まっていた。

東芝機械事件

ソ連は潜水艦の静粛化にも取り組み始めた。タービンのギアやシャフト、プロペラなどの精度を桁違いに上げたことで「騒々しい」潜水艦から「静かな」潜水艦への脱皮を図る。新型潜水艦の中には「鉄壁の守り」と思われていたSOSUSをすり抜ける艦も現れた。

潜水艦の静粛化をめぐるのは、私たち日本人にとって忘れられない事件が87年に発覚する。東芝機械事件だ。潜水



会川晴之（あいかわ・はるゆき）

北海道大学法学部卒。87年毎日新聞社入社。盛岡支局、東京本社経済部、政治部、外信部、ウィーン特派員、欧州総局長（ロンドン）、北米総局長（ワシントン）、専門編集委員などを経て、2025年4月から客員編集委員。日米政府が進めたモンゴルへの核廃棄物計画の特報で2011年度のボーン・上田記念国際記者賞、毎日新聞連載「核回廊を歩く 日本編」で、16年科学ジャーナリスト賞を受賞。著書に「核の復権 核共有、核拡散、原発ルネサンス」（角川新書）「核に魅入られた国家」（毎日新聞出版）などがある。

艦のプロペラを削り出す工作機械とソフトウエアを、東芝機械が82年から84年にかけて不正にソ連に輸出したことが共産圏諸国に機微技術の輸出を禁じたコム（対共産圏輸出統制委員会）規制違反に問われた。

米国は、ソ連がこの工作機械を使い始めたことで、ソ連の原潜の静粛化が進んだと日本を厳しく非難、政治問題に発展した。事件の責任を取り、東芝機械の親会社である東芝の佐波正一会長、渡里杉一郎社長が辞任した。

余談だが、東芝が日本で初めて開発したワープロ「RUPPO」で、「さば」とひらがなを打ち込み変換キーを押すと「鯖」ではなく「佐波」が最初に出てきた。不思議に思い東芝に取材すると「社内文書をもとにワープロの辞書を作った。社内文書に佐波会長の名が頻繁に登場したのが原因だろう」と教えてくれたことを思い出す。佐波さんは私のような駆け出しの記者の夜回り取材にも丁寧に応じてくれる紳士だった。

閑話休題

米国が苦勞して築きあげた「透明な海」が濁り始めた原因は、ソ連原潜の行動様式の変化、静粛化に加え、搭載するSLBMの射程の大幅な延伸もあった。

ソ連は72年からヤンキー級戦略原潜の後継艦としてデルタ級の就役を始めた。搭載するSLBMも新型に更新し、射程が6000^キ以上へと伸びた。この結果、ソ連近海のバレンツ海や北極海、オホーツク海にとどまっていたても、米本土にSLBMを撃ち込むことができるようになる。SOSUS網を越えることで、米軍に捕捉される危険を冒さなくても良い環境が整った。

ソ連の戦略原潜は、味方の艦船に守られながら北極海やオホーツク海などの「要塞（バスチョン）」に閉じこもった。米国の原潜と同様、ソ連の原潜は北極の厚い氷を破って浮

上できる。その態勢でSLBMを発射できた。

米国はこうした状況変化に対応する必要に迫られた。86年からソ連の原潜基地に近い海域にまで攻撃原潜を派遣して、監視する作戦を始めた。従前は、SSUSを通過した前後から、攻撃原潜と海上艦、対潜哨戒機などが束になって対潜水艦作戦を実施していたが、新たな最前線はソ連が嚴重に防御している原潜基地周辺となる。米国の海上艦や対潜哨戒機の投入は困難で、監視・追跡役は攻撃原潜だけに委ねられた。

派遣された米国の攻撃原潜はソ連の戦略原潜が基地を出航した時点から捕捉する役目を負った。作業を完璧にこなすには、理論上、攻撃原潜が100隻も必要になるとされた。米国は「潜水艦版スーパーカー」の異名を持つ高性能な新型攻撃原潜シーウルフ級の建造を決めるなど対応に追われた。

ただ、戦略原潜の半数程度が常時、哨戒活動に当たっていた米国と違い、ソ連は戦略原潜の8〜9割を母港にとどめていた。この緩い運用が、攻撃原潜不足に陥っていた米国を救った側面もある。

年を経るごとに次々と静粛なソ連の原潜が就役し、「とても静かな」潜水艦同士の戦いの時代が目前に迫る。それへの対応に苦慮していた米国を救う歴史的な大事件が起きた。東西冷戦の終結だった。第二次世界大戦の末期に登場

したドイツの新型Uボートへの対応策を見いだせない中、終戦を迎えたのと同様、米国は今回も「ゴングに救われた」形だ。

次回は、潜水艦をめぐる米ソのスパイ合戦を描く。

|| つづく